

「ゴッドファーザー デジタル・リマスター版」

★★★★★

2009（平成21）年1月1日鑑賞く梅田ブルク7

監督：フランシス・フォード・コッポラ
 ドン・ヴィトー・コレオーネ（ゴッドファーザー）／マーロン・ブランド
 マイケル・コレオーネ（ドンの三男）／アル・パチーノ
 サンティノ・“ソニー”・コレオーネ（ドンの長男）／ジェームズ・カーン
 フレデリコ・“フレド”・コレオーネ（ドンの次男）／ジョン・カザール
 ケイ・アダムス・コレオーネ（マイケルの恋人、後の妻）／ダイアン・キートン
 トム・ヘイゲン（弁護士、ドンの相談役）／ロバート・デュヴァル
 クレメンザ（コレオーネ・ファミリーの幹部）／リチャード・カステラーノ
 コニー・コレオーネ・リッジ（ドンの末娘）／タリア・シャイア
 マクラスキー（悪徳警部）／スターリング・ヘイドン
 ジャック・ウォルツ（映画のプロデューサー）／ジョン・マーリー
 ドン・エミリオ・バルジーニ（タッタリア・ファミリーの同盟者、襲撃の黒幕）
 リチャード・コンテ
 ソロツォ（ドンに新事業への参入を申し出るトルコ人）／アル・レッティエリ
 カルロ・リッジ（コニーの夫）／ジャンニ・ルッソ
 オッティリオ・キユネオ（イタリア移民の密入国、賭博を支配する男）／ルディ・ポンド
 モー・グリーン（ラスベガスのホテルのカジノ王）／アレックス・ロッコ
 アポロニア・コレオーネ（シチリアでマイケルが結婚した女）／シモネッタ・ステファネッリ
 ファブリツィオ（マイケルの護衛）／アンジェロ・インファンティ
 1972年・アメリカ映画・175分
 配給/パラマウント=CIC

<壮大な叙事詩をあらためて>

2008年から09年の年末年始にかけて梅田ブルク7で特別上映されたのが、デジタル・リマスター版による名作『ゴッドファーザー』。この映画は私の選ぶ洋画ベスト5に入る歴史的な名作で、これ以上のギャング映画は存在しないと断言できる出来。1972年のアカデミー賞作品賞、主演男優賞（マーロン・ブランド）、脚本賞などを受賞したのは当然だ。

ゴッドファーザーことドン・ヴィトー・コレオーネを演じたマーロン・ブランドの圧倒的な存在感が第1の注目点だが、ハリウッド映画の歴史的視点からはそれまでほとんど無名だったフランシス・フォード・コッポラ監督の起用と、ドラマ後半になるにつれてその存在感と冷酷さを増してくる三男マイケルを演じた当時新人だったアル・パチーノの名演に注目！

1972年は私が司法修習生になった年でとても映画を観る余裕はなかったから、私は『ゴッドファーザー』を映画館で観たわけではないが、その後の『ゴッドファーザーPART II』（74年）、『ゴッドファーザーPART III』（90年）を含めて何度もビデオで観たため、物語の大筋は今でもバッチリ頭に入っている。また多くの『シネマルーム』ファンの皆様も大筋はご存知のはずだから、ここではストーリー紹介は極力省略し、あらためてあの壮大な叙事詩をデジタル・リマスター版で鑑賞した中で心に残ったポイントだけを。

<「ファミリー」という言葉をしっかりと>

この映画はアメリカに移住して活躍（暗躍）するイタリア・マフィアの実態を一挙に有名にしたが、そのキーワードはファミリー。ここで言うファミリーとは、ドン・コレオーネを頂点とした文字どおり家族の絆だが、それに限定されないコレオーネ式ファミリーの姿が興味深い。映画の冒頭描かれるのは、ドン・コレオーネがまるでよらず相談所の所長のように相談に来た人々の悩みを聞き、それに対して親身になって世話をしている姿。彼はそれに対して格別の報酬を求めるわけではなく、ドンへの信頼と尊敬の念を示し、いつか彼が必要とした時にお返しをすればいいだけ。映画の冒頭に描かれる映画プロデューサーのジャック・ウォルツ（ジョン・マーリー）に対して、ある俳優の出演要請をするため信頼する弁護士である相談役のトム・ヘイゲン（ロバート・デュヴァル）を派遣するシーンをみていると、それがよくわかる。しかし、礼を尽くしたトムからの申し出に対してウォルツが拒否すると、その報復は・・・？

<ドンの子供たちは？>

ドンの子供たちは長男ソニー（ジェームズ・カーン）、次男フレド（ジョン・カザール）、三男マイケル、末娘コニー（タリア・シャイア）。ドンが相談者たちの話を聞いていたのは、末娘コニーの結婚式当日という忙しい中だったが、テキパキとした事情聴取とそれに対する部下への指示が終わると、ドンは父親らしい顔を見せながらコニーとのダンスを楽しんだが、さてコニーの夫となるカルロ・リッジ（ジャンニ・ルッソ）はどこまでファミリーに入り込む？ドンはカルロはファミリーに入れないとハッキリ言っていたが、それはなぜ？

長男のソニーは、ソロツォ（アル・レッティエリ）から持ちかけられた麻薬取引の話でドンがきっぱり断ったことに少し不満らしい。しかし、そんな親子間のちょっとした意見の違いがソロツォに見えてきたことによって、その後大変な抗争が起きること。

三男のマイケルは恋人のケイ（ダイアン・キートン）といずれ結婚するつもりらしい。そしてサラリーマンタイプの彼（？）はファミリーの仕事にタッチしていないようだが、意外にそんな人間にドンの本性が受け継がれているかも・・・。

<血で血を洗う抗争模様をじっくりと>

2008年12月27日に始まったイスラエルによるハマスへの攻撃（空爆）は連日続いたうえ、大量の戦車投入をとまなう地上戦にまで発展しているが、何十年も続いてイスラエルとパレスチナの血で血を洗う民族抗争は解決の方向が全く見い出せていない。

それと同じように、ソロツォによるドンの「暗殺」で始まった、コレオーネ・ファミリーとタッタリア・ファミリーおよびバルジーニ・ファミリーとのファミリー間抗争は、以降タッタリアの息子の死亡、ドンの長男ソニーの死亡という大きな犠牲を経て休戦協定が結ばれることになるが、これはイスラエルとハマス間の休戦協定のようにかなり不安定なもの・・・？現にあれだけの銃弾を撃ち込まれながら奇跡的な生還とドンへの復帰を果たしたドンの音頭取りによってやっと休戦協定が成立したのだが、ドン自身もそんな協定がずっと続くとは考えていなかったようだ。しかも、この「五者会談」によって真の敵がタッタリア・ファミリーではなくバルジーニ（リチャード・コンテ）だと見抜いたドンは、以降次なる抗争に備えて着々と手を打っていくことに・・・。

<マイケルの見せ場 その1>

ドンの後継者と自他共に思われていたのが長男のソニーだったが、ソニーは割と単純な武闘派？その歯止め役が相談役で弁護士のトムだが、ドンの病院の警護がないことに気づき、危機一髪のところをソロツォの奇襲から救ったマイケルが、ここで意外な役割を果たすことに。

それは、ドン暗殺の直接の命令者であったソロツォと、彼と組んだ悪徳警部マクラスキー（スターリング・ヘイドン）からの呼び出しに応じたうえで彼ら2人を逆に殺害すること。父親の生き方に懐疑的でピストルなど持たないサラリーマンタイプのマイケルが、なぜここに至って積極的にそんな役割を？そして、その作戦は？これが前半の1つのハイライトシーンになるから、アル・パチーノ演ずるマイケルの見せ場その1をしっかりと。

<マイケルの見せ場 その2>

ソロツォとマクラスキー警部の殺害に成功したマイケルは、今は2人の部下を連れてアメリカを離れシチリアに身を隠していた。もちろん、その居所は恋人のケイにも内緒。したがって、マイケルには逆に女性に関しては行動の自由があるようだ。そんな予想どおり（？）、マイケルがここで一目惚れしたのが、地元の美しい娘アポロニカ（シモネッタ・ステファネッリ）。一目見ただけでその父親に対して「娘さんと結婚させてくれ」と申し込むマイケルは、さすがプレイボーイ・・・？もっとも、マイケルはファミリーを離れて気楽に遊んでいるわけではなく、迫ってくる追手を警戒しながら逃げ回っている身分。そんなマイケルにもたらされたのが、兄ソニーの無惨な死の情報とここにも危険が迫っているから逃避先を移動しろという命令だった。

それにしたがって移動準備中のマイケルの代わりに犠牲になったのが、「私が運転する」と言って車に乗り込んでいた新妻のアポロニカ。ファミリーから離れ、1人故郷シチリアの地で自由奔放に生きる（？）そんな姿が、マイケルの見せ場その2だ。

<スナリ世代交代を果たしたマイケルの戦略は？>

王室でも政権でもそしてギャングでも権力承継と世代交代は難しいから、モメることがよくあるのは当然。血で繋がったファミリーの承継と世代交代は、兄弟が多いとよけい難しくなることが多い。しかしコレオーネ家の場合、長男ソニーが殺されたことと、ドンの意向の絶対性によってマイケルへの権力承継と世代交代がスムーズに実現できたのはラッキーだった。

ドンの死亡後、新たなドンとなったマイケルが立てた戦略は、コレオーネ・ファミリーの本拠地をニューヨークからラスベガスへ移転すること。なぜそれが必要なのか？それにいかなる価値があるのか？については、ストーリー展開上から十分に読みとることはできないが、ラスベガスのホテルとカジノを仕切っているモー・グリーン（アレックス・ロッコ）に対するマイケルの交渉ぶりは実に堂々としたもの。もっとも、「君のカジノは赤字だ。我々に任せろ」と言われて「ハイ、そうですね」とモー・グリーンが答えないのは当然だから、ここに新たな抗争の予感が。

それにしても、権力掌握後の人事の決定を含め今やマイケルの存在感が際立ってきたが、コニーの子供の名づけ親となるため教会の儀式に参加したマイケルが、その一方で部下たちに指示していた壮大な計画とは・・・？

<マイケルの最後の見せ場は？>

この映画では、一体何人が殺されていくのだろうか？そんな点に興味のある方はきちんとメモをとっていけば面白いかもしれないが、ストーリー展開上最後の殺され役となるのがコニーの夫であるカルロである。映画の冒頭あれだけコレオーネ・ファミリーから祝福されて結婚式を挙げたにもかかわらずカルロは暴力亭主だったようだから、そんな夫に殴られて変形した妹の顔を見たソニーが頭にきたのは当然。もっとも、コニーとカルロとの夫婦ゲンカの凄まじさは並大抵のものではない。したがって「2度と妹に暴力をふるったら、今度は殺すぞ！」と脅しておいたのに、カルロがコニーにまた暴力をふるうとは・・・。

妹のコニーからの電話を受けたソニーが、トムたちの制止も聞かず怒りに任せて1人車で屋敷から飛び出して行ったのはまずかったようで、某ファミリーからの待ち伏せの形でソニーはあっけない最後を遂げることに。こりゃひょっとしてバルジーニらの策略？さすが、冷静沈着なマイケルは頭がいい。そう読んだマイケルが、ソロツォやバルジーニたちの大掃除が終わった後、カルロの家を訪れ、静かにカルロに対して（誘導）尋問をしていくと・・・。

もっとも妻のコニーにしても、夫のカルロと夫婦ゲンカはしていても夫を殺してくれとマイケルに頼むはずはない。したがってマイケルの下へ怒鳴り込んできたコニーの姿を見て、今や息子も生まれ仲の良い夫婦関係を保っている妻のケイが嘆いたのは当然。まさか、夫のマイケルが、実の妹コニーの夫カルロを殺害したの？そんな疑惑を口にするケイに対して、「仕事のことは一切口を出さな」とマイケルが怒鳴ったのは当然。しかし、その後のマイケルの対応が最後の見せ場だ。すなわち、「今回は1度だけ答えてやろう」と前置きしたマイケルは、ケイからの「殺したの？」の質問に対して明確に「NO」と答えるわけだ。これにケイが安堵したのは同然。なるほど、嘘も方便とはこういうこと！

ここまで冷酷になり、嘘も平気でつけるようになったのは、まさにマイケルがコレオーネ・ファミリーの真のドンに成長したことを物語るもの。しかし、3時間の大作の印象的なラストシーンとは？壮大な叙事詩の展開にあなたは心から満足するとともに、ここに誕生した若きコレオーネ家のドンのこれからの動きに大きな脅威を感じるはずだ。